

# 世界金融危機と朝鮮民主主義人民共和国の経済 —資本主義通貨金融危機に対する歴史的考察—

朝鮮社会科学院経済研究所研究員 黄哲鎮

去る世紀末から21世紀はじめにかけて継続した資本主義の世界経済の長期的な経済沈滞は、2003年下半期に入ってやっとうゆるやかな回復の気配を見せるようになったが、最近に入って再び破局的な経済危機、金融危機によって揺れている。

資本主義の世界経済を一大破局と混乱に追い込んでいる現在の世界金融危機を理解するためには、資本主義の金融危機の歴史に対する正しい認識が必要である。

私的所有に基づいて自然発生性と無政府性競争が支配する資本主義の下では貨幣流通秩序と信用システムが混乱して、破綻する現象がひんぱんに起こる。このような現象をさして、資本主義の通貨金融危機または簡単に資本主義の金融危機といい、そのような現象が一国の範囲を抜け出して、世界的範囲において共時的に波及することを世界金融危機という。

金融危機は、貨幣流通量の大幅な変動によって貨幣価値と物価が大きく上下して、資本主義の発券制度が破綻する通貨危機、および既存の信用関係が破壊されて信用機関、金融機関の活動が混乱・破綻し、無秩序状況が深刻になる信用危機とに区分することができる。しかし、これは資本主義経済下において、貨幣流通と信用システムが組み合わさって展開する条件下で共に密接な因果的連関を持って一つの統一的過程として発生し、展開する。

金融危機は、過剰生産恐慌によって引き起こされ、一旦発生した金融危機は経済恐慌を深化させて、その破壊力を増加させる作用をする。金融危機は、過剰生産恐慌とは別に通貨膨脹の深化、金利と外国為替相場の急激な変動、有価証券相場の波動等の要因によっても発生するし、この場合先に発生した金融危機が経済恐慌の開始を予告し、それを先導する作用をする。金融危機と経済危機との間のこのような因果的相互連関性から、金融危機を金融経済危機、経済金融危機と言うこともできる。

資本主義の経済危機の歴史は、通貨金融危機の歴史である。

金融危機は、近代的な資本主義の通貨金融制度である「金本位制」から米ドル中心の現在の国際通貨金融制度に至る資本主義の通貨金融制度の発展のさまざまな段階で続々発生し、深刻化して、一国の範囲を越えて世界的範囲に展開してきた。この過程において資本主義世界は、1930年代、

1970年代、1990年代、そして現在の世界金融危機を含めて、数多くのさまざまな通貨金融的混乱と破局を体験した。

歴史的に見ると、初めての金融危機は「金本位制」時期に起きた。この時期、資本主義の通貨金融危機は発券銀行から金の大量流出と「金本位制」条件に対する不安とその破綻として発現した。「金本位制」は資本主義諸国において、金と銀行券の自由兌換機能によって、銀行券をはじめとする通貨形態の信用が担保されたことで貨幣流通と信用関係の安全性が自然発生的に保障された。

しかし、「金本位制」が貨幣流通と信用関係の安全性を担保するといっても、それはあくまでも相対的、制限的であるに過ぎなかった。「金本位制」は、金と銀行券の自由兌換によって流通貨幣量を自動的に調節しながら、同時に流通貨幣量を発券銀行の金準備に拘束させる矛盾を持っているので、ある要因によって流通貨幣的需要が急激に増える時には通貨金融的混乱を避けられなかった。実際には資本主義諸国における拡大再生産と信用関係が急激に拡張したことによる流通貨幣的需要の急激な増加が、発券銀行における通貨発行のための金準備が不足するという矛盾を通じて、通貨金融的混乱を引き起こすかたちで表面化したのである。

資本主義が帝国主義に移行して、資本主義、帝国主義国家の海外膨脹欲が強化されることによって、各国における通貨金融的混乱は徐々に世界的性格を帯びることになった。20世紀に入って、資本主義の世界における経済恐慌や凶作等の危機的事態が頻繁に発生して、それに対処するための国際的な金の大量流出の現象が増えた。他方、第1次世界大戦前夜に至っては、侵略戦争を準備する帝国主義国家による赤字公債発行の結果として、銀行券の乱発が進行した。

その結果、全般的な資本主義諸国において価値を完全に喪失した銀行券と金との兌換要求が急激に高まったし、銀行では金兌換による金流出が増えることになった。また、金保存、金準備は自由兌換の要求に応じることができないほどまで減る危機的事態が起きた。

このような事態をきっかけに資本主義諸国における「金本位制」は、第1次世界大戦を控えた1913年にほとんど同時に停止される事態が起きた。「金本位制」の停止は、この制度を基礎とする資本主義発券制度の破綻をもたらし、

不換紙幣の乱発は資本主義諸国では収拾できないインフレの危機を引き起こして、資本主義貨幣流通体系を深刻な混乱と危機に追い詰めた。

「金本位制」の停止は、またこの制度に根元を置いていた資本主義外国為替制度、国際金融決済、国際貿易決済など資本主義の通貨金融領域に深刻な混乱と危機をもたらしたし、その結果、1914年に資本主義の歴史上初の世界金融危機が発生することとなった。

金本位制が停止されて、帝国主義戦争が拡大されることにともない、不換紙幣の乱発が大々的に行われたことで帝国主義国家ではどうすることもできないインフレ的危機が起きた。その代表的な実例がドイツのハイパーインフレーションであった。

第1次世界大戦が終わった後、一定の期間が過ぎて帝国主義諸国では深刻なインフレ的危機から抜け出すために貨幣改革をはじめとするさまざまな通貨緊縮政策を実施した。一方、「金本位制」を復旧しようとする試みによって、1924年から1928年間に「金塊本位制」と「金為替本位制」という奇形的「金本位制」を導入した。奇形的「金本位制」の下では、金と銀行券の自由兌換が完全に成り立たない制限性によって、貨幣流通の相対的安全性さえも保障しにくくなった。

このような状況への対策として、この時期、資本主義諸国では通貨金融の安全性を財政金融的手段を利用した人為的な景気調節政策によって確保しようとする動きが現れた。しかし、資本主義諸国において人為的な景気調節政策は通貨金融関係の安全性を確保できなかったことはもちろん、資本主義経済に内在した再生産の矛盾を深化させて、1929～1933年に世界的範囲での過剰生産恐慌を起こして、それに基づいて前代未聞の世界金融危機を爆発させる結果をもたらした。

1929～1933年の世界金融危機をきっかけに、資本主義の歴史上初めての通貨金融制度であった「金本位制」は終局的に崩壊し、資本主義世界における通貨金融的混乱は最も深刻な様相を帯びることになり、国際的範囲における国際間の通貨金融的混乱と対立が激化した。

第2次世界大戦後、資本主義世界では「金本位制」にかわって「ブレトン・ウッズ体制」と命名される米ドルを中心とする新しい国際通貨金融制度が樹立される変化が起きた。「ブレトン・ウッズ体制」は、金本位制の崩壊で最も深刻となった資本主義の経済危機から抜け出そうとする米国の中心にした資本主義諸国間の従属と結託の産物だった。この体制の下で米ドルは金の代わり世界基軸通貨になり、資本主義世界のすべての国々は自らの通貨を米ドルに

よって評価され、その外国為替相場を米ドルを基準として上下1%の範囲で固定させなければならない義務を負った。

このような国際的な通貨制度に基づいて、資本主義諸国は流通貨幣に対する人為的な調整と管理によって、経済的混乱と危機を回避しようと努力したが経済危機を克服することはできなかった。

資本主義世界は、第2次世界大戦後から1950年代までは戦時および戦後のインフレとその後遺症に苦しめられなければならなかったし、1960年代には独占資本の資本蓄積と経済の「高度成長」を促すために実施した景気刺激政策の結果として、通貨の過度な発行が起きた。この過程で潜在的に発生していた通貨危機、「クリーピング・インフレーション」(creeping inflation) が徐々に「ギャロッピング・インフレーション」(galloping inflation) へと表面化することになった。

この時期「ブレトン・ウッズ体制」によって、無理に維持されてきた国際通貨金融秩序は自体の矛盾と制限性、米国の経済的、通貨金融的地位の弱体化で危機に直面した。「ブレトン・ウッズ体制」下において、米ドルは国際基軸通貨でありながらも、個別の民族貨幣でもあるため、その価値は世界経済によってではなく米国経済の状況によって左右される。ある国の民族通貨が国際的範囲で基準通貨、決済通貨、準備通貨として利用されようとするならば当該通貨国の国際収支の均衡を超過する通貨の流出が避けられないが、これは価値が比較的安定していなければならない基準通貨の条件に外れる矛盾を持った状況である。

米国経済が朝鮮戦争とベトナム戦争への過度な費用支出とドル流出の増大、貿易収支赤字の出現などで衰退して、その反映として米ドルの対外価値がどうすることもできなくなるほど下がる中で、「ブレトン・ウッズ体制」はついに1970年代初頭に崩壊することになった。

それで1970年代には、長期間にわたる景気刺激政策と「ドル危機」の深化、戦後国際通貨金融関係を支持してきた「ブレトン・ウッズ体制」の崩壊、そして世界的に深刻になった「資源危機」が結びついて悪化した「スラグフレーション」と大規模な1974～1975年の世界金融危機が資本主義世界を襲うことになった。

資本主義世界における「キングストン協定」に基づいて、従来人為的に維持された固定相場制から変動相場制に移った。変動相場制の導入によって、資本主義世界において各国の外国為替相場と貨幣流通は自然発生的な市場景気の変動と偶然的な要因によって非常に流動的、無秩序に変動し、それにより貨幣流通と信用秩序はより一層混乱することになった。

この時期、資本主義諸国では資本の国際化が急速に推進されて国際間の通貨金融関係が密接になることにより、金融自由化を基本とする「金融革新」が第2次世界大戦後の資本主義世界で起きた重要な変化の一つとして強行され始めた。

1980年代に入って、米国をはじめとする主要資本主義諸国では、資本主義世界に長い間持続してきたスラグフレーションと極度に膨張する大独占資本の限らない欲望、金融に対する国家的規制の間の矛盾、過剰貨幣資本の累積、「通貨主義」の台頭などを背景に「金融革新」の美名の下に金融の自由化、金融の証券化、金融の国際化が急速に推進された。

金融の自由化と金融の証券化は、色々な金融商品が奇形的に膨張することにより、すべての資本主義諸国で金融資本が再生産循環から最も加速的に離脱し、実物経済に比べ金融経済の膨大な拡大をもたらすことにより、各国において金融分野の脆弱性を最も顕著に表した。そして金融の国際化は、資本主義世界において国際間の金融取引が空間的および制度的な制約を受けずに国際的範囲で自由に進行されることによって、国際間の金融的相互依存性を非常に強化し、一国での金融危機が全世界に簡単に波及する客観的条件を作り出した。

1970年代中半期から1980年代を経て、大々的に進行された「金融革新」によって、資本主義世界の経済全般はバブル化、投機化された。また、それは資本主義の再生産の均衡を破壊して、世界的範囲での経済危機をなおいっそう深化させた。

資本主義諸国は1980年代に入ってから、金融に対する経済の依存度が高くなり、不動産および有価証券の価格の騰貴による「資産インフレ」と「バブル経済」現状が蔓延することになり、1990年代に入ってから、世界的な通貨金融危機が世界のさまざまな地域と国で相次いで起きて、一般的な資本主義諸国により大きな破壊的結果を及ぼし、急速に拡大した。

1990年代の資本主義世界における1992年のポンド危機、

1994年のメキシコ金融危機、1997年の東南アジア金融危機、1998年のロシア金融危機、1999年のブラジル金融危機など全世界的性格の大型金融危機がつぎからつぎへと爆発した。絶え間ない混乱と波動に苦しめられた資本主義の世界経済が20世紀最後の10年の間に極度に膨張した寄生的な金融資本の無制限的な貪欲と自由主義的資本主義の市場原理の世界的普及によって、制御できない通貨金融危機、経済危機に巻き込まれることになった。

1990年代の世界的な金融危機は、以前から深刻化してきた資本主義の通貨金融的混乱と危機の連続過程であり、その反映ではあるが、以前とは色々な側面において区別される特徴を持つ。

それは、通貨金融危機がまず、国際的な過剰流動性貨幣の大量的な流出入過程において発生した危機ということであり、次に、当該国や地域において、外形上経済成長率が高く、外貨準備高が一定に増加していた条件で発生したことであり、三番目は、それらすべてが外国為替相場の暴落によって爆発して、地域的および世界的範囲で金融危機を起こして全般的経済危機を深化させたりしたことである。

このように見ると、第2次世界大戦以後から1990年代以前の金融危機は、米ドル中心の国際通貨金融体系に基づいてもたらされた国内における証券市場の波動、国際収支の悪化、財政収支の悪化と関連して発生したと見られる。

金融危機は、新世紀に入って米国、日本をはじめとする大多数の資本主義諸国においてさまざまな形態と規模で絶え間なく発生して、深刻化している。特に、現在、資本主義世界経済は米国において、住宅信用貸付市場が崩壊して波及した世界金融危機によって、1930年代の世界金融危機以来、最悪の事態に直面している。

資本主義金融危機に対する歴史的考察は、通貨金融危機こそ私的所有に基づいて自然発生性と無政府性が支配する資本主義制度において固有に現れる合法的現象だということを示している。

[朝鮮語原稿をERINAにて翻訳]